8/18 P38～義夫は小学～ 8/16 P32 ぼくが六年生の（　）

この二・三日、母の容態のおもしろくないことは知っていた。あさっての六年生だけ一晩どまりで日光へ行く遠足は、このぶんだとやめてもらうかもしれないと姉にいわれた。母が悪いということと、母が死ぬかもしれないということは、ぼくの心で一つにはならなかった。

小学五年生の義夫は、四百メートル競走に出場するが、六年生に勝つために、犠性になって全速力でスタートして六年生のペースを乱すように言われた。しず子は義夫の競走のはじまるころ、そっと学校へ見に行った。トップを切っているのは、案のじょう義夫だった。もう半分以上も走ったのに、彼はトップを維持していた。

147字

123字

8/18 P44 ぼくたちは

8/17 P40 きょう一日の〜

沢登りの練習はすべて順調に進み、泉はめさめきとうでをあげた。はじめての泉がいるので、子どもだけでは本流の三つめの滝までしか登ってはいけないといわれている。泉は、みんなの話をだまって聞きながら、あることを考えていた。もし、わたしがぬけたら、あした、みんなは沢登りにいける。

ぼくたちは、ひえきったからだに、しかのぬくみを得たためか、深いねむりにおちていった。とつぜん、目がさめた。シカたちが、たちあがっていた。岸耳の大シカがいたので、次郎吉さんが、銃を取ったので、「あの大シカのために命がたすかったのじゃないですか」というと、次郎吉さんは、うなずいて、銃をかたわらにおろした。

151字

135字

8/18 P46 インドのカルカッタで

ヒンズー教徒の休憩所をかりられることになり、キリスト教徒のマザーは驚いた。かけつけた何人かのシスターたちとそうじをして、ちらかっていたこの大きなあき家は、みるみるさっぱりした。ゆきだおれていた人びとがはこびこまれた。この家でマザーはだれからも愛をそそいでにされない人びとにこそ、愛をそそごうとした。

8/18P 50 山越しの夜道に

長いなわきれのようなものをふまえ、それは砂まみれになったうなぎだった。秋になると、うなぎは卵を産みに、海に入り、フィリピンあたりまでゆくらしい。遠い海への長旅に、絶えず気をとられているうなぎは、わたしの気づかないうちに、いつのまにか草をもぐって、水の中に、すべりこんだらしかった。